



宇都宮大学  
UTSUNOMIYA UNIVERSITY

宇都宮大学

# 教職大学院通信

〔大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻〕

第 16 号

H29.1発行

## 学園を飛び出し、さらなる学びの機会を—学会参加報告記—

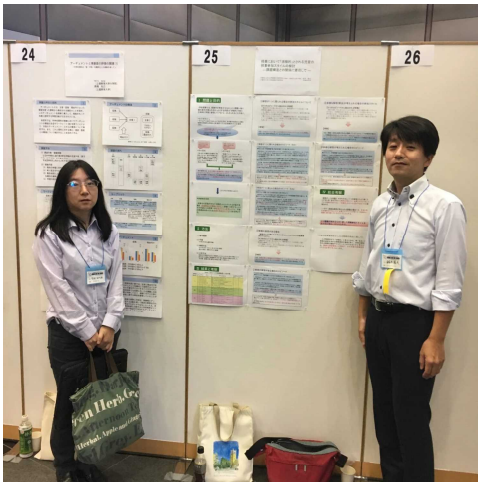
教職大学院生の学びは、多様なものです。そのひとつに学会活動への参加が挙げられます。協力校における長期実習や日々の演習や講義で学んだことなどをまとめて発表することで、宇都宮大学教職大学院という学園の枠組みを超えて、学びの場を全国へと広げるチャンスを得ることになります。今回は、そんな例の一部を、実際に参加した院生のみなさんの声からご紹介し、教職大学院での学びの多様性や可能性をご説明できればと思います。

### ◆鈴木隆夫さん（教職大学院2年）

私は、「授業において『消極的』とされる児童の授業参加スタイルの検討」という題目で、実習校で観察した視点児の学びの姿を分析し、日本教育心理学会第58回総会（於：香川大学）でポスター発表をしました。

発表本番では他大学の教員や院生、現職教員などさまざまな参加者が関心を示してくださいました。2時間の発表時間はあっという間に過ぎ、自分では気づかなかった視点からの意見を多数得るなど、有意義な対話ができました。私にとっては子どもの見方の"引き出し"を広げる貴重な機会となりました。

現場に戻ってからも可能な範囲でこのような場に参加し、多種多様な立場の方と対話することで「自分の子どもの見方を問い直す」必要性を実感させられる学会参加でした。



（指導教員の司城准教授と鈴木さん [右]）

### ◆小林真也さん（教職大学院2年）

私は、日本数学教育学会秋期研究大会（於：弘前大学）で、「算数の力を高める学び合い—児童の実態に即した算数の授業づくり—」というテーマで口頭発表をしました。内容は、昨年度の実習を基にしたもので、実習校の先生方と協働的に学び合いの授業づくりに取り組んだ過程や、算数の授業を通して実習校の児童に育成すべき力を明らかにした過程について発表を行いました。

会場には、研究の際に参考にした理論の考案者である石田淳一先生（横浜国立大学）が来てくださり、多くの示唆をいただきました。特に「算数授業での話し合いができるようになるには、そのモデルを子どもに示す必要がある。」という言葉が印象に残りま

した。私の中には子どもたち同士で意見をつなぎながら問題を解決したり、新たな考えを生み出したりするといった話し合いの理想像がありましたが、それを子どもたちに示すような実践をしたことがなかったので、新たな研究の視点を得ることができました。



（発表時の小林さん）

### ◆金井司さん（教職大学院1年）

私は、日本科学教育学会と臨床教科教育学会で中学校理科における天文学習に関する研究を発表する機会をいただきました。論文の執筆や発表の準備など学会への参加を通して、天文分野での教材や授業デザインについて知見が広がりました。

これまでの学校現場での授業研究の実践よりも先行研究のサーヴェイにじっくりと時間をかけることができ、より広く深く研究テーマに関する教育理論を学ぶことができたと感じます。それらの理論に基づいた授業を行い、結果の考察と分析までの研究を通じて、成果を得るとともに新たな課題に気づくこともできました。これは教職大学院の目指す「理論と実践の往還による学びの深化」のひとつであると思います。

この他にも、多くの院生が自主的に多様な学会（例えば、今年度は日本社会科教育学会や日本LD学会、日本教師教育学会など）に参加し、発表やシンポジウムを聴くことで新たな学びの機会を得ています。ある学会に参加し、シンポジウムの登壇者の話に大いに触発され、その登壇者の著作を多く買い込んで読んでいますというような院生からの報告も身近にあるところです。

学会以外にも全国各地の学校で開催される研究集会にも多くの院生が参加しています。

院生の控え室では、各自の学会や研究集会に参加した際の「土産話」（時には発表資料やご当地の銘菓も）が飛び交っており、これ自体が素晴らしい学びの時間であり、場となっているといえます。

（文責：小野瀬善行）

## 「協働学習を成立させるためのポイント」 教育実践高度化専攻教授 久保田 善彦

アクティブ・ラーニングに不可欠なのが、協働学習です。しかし、それは単にグループ活動をさせればよいわけではありません。幾つかのポイントがあります。

図は、Brown(1996)による学びの共同体の基本構造です。より深い学びとなるためには、「必然性のある課題」と「探求活動（試行錯誤のできる活動）」そして「反省的思考・内省（活動の途中や終わりに振り返り、それを改善につなげる）」が必要です。ここまでは、個の学習にも大切な要素です。協働学習に特有なのは、「情報の共有」です。次の三つをうまく共有させたいものです。第一に、課題・目標の共有です。第二に、（観察など学習の）対象の共有です。第三に、思考の共有です。課題や対象はICT機器を用いると共有し易くなります。思考の共有には、言語が大切です。それに加えてワークシートや思考ツールなどを用いると効果が促進します。



## 《シリーズ:教職大学院授業紹介⑩》 「言語活動を軸にした教育内容・方法論」 (選択科目[前期])

今更言うまでもないことですが、現在日本の教育に求められている課題、即ち「思考力・判断力・表現力」を子ども達に育てていくためには「言語活動の充実」が必至です。

しかし、子ども達が「言語活動」を通して思考力等を育てていくためには、まず「大人」としての教師自身が「言語活動」をたくさん経験している必要があります。そこで、本授業では、「大人」である院生自身が、自分が今一番議論（対話）してみたいテーマを選び、そしてそのための「教材」を準備し、他の院生（大人）を相手に一時間（90分）授業をしてみる、ということを実践しました。つまり、「大人のための言語活動（略して「オトゲン」）」を、受講者である一人一人の院生が実践しました。

院生の皆さん一人一人が選んだテーマは多様です。例えば、「日本国憲法」について。「子どもの自死」について。「理想の学校」について。あるいは「生きることに『力』は必要なのだろうか?」、



「生きがい」、「愛」、「人とかかわり」等について。そして例えば、「日本国憲法」をテーマに選んだ院生のSさんは、小説家・井上ひさしが「憲法」を自ら分かりやすくかみくだいた「翻訳」を教材の一部として使い、実践しました。

「どんなもめごと／筋道をたどってよく考えて／ことばの力をつくせば／かならずしずまると信じる…／よく考えぬかれたことばこそ／私たちのほんとうの力なのだ」『井上ひさしの「子どもにつたえる日本国憲法」』講談社

上に引用した最後の「よく考えぬかれたことばこそ／私たちのほんとうの力なのだ」という一節は、まさに本授業が目指したものと言えます。この他にも、院生の皆さんは、様々な文章、詩、歌詞、そして何より自分自身の言葉で問題提起し、対話することを通して、思考し、判断し、表現する経験をたっぷり積み重ねることが出来たと思います。(担当:青柳 宏)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻（教職大学院）

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。